



間伐実施後の下層植生 モニタリング調査

間伐の実施が、森林が有する防災機能や生物多様性保全機能に与える効果を検証するため、間伐後の下層植生の変化をモニタリングしています。

間伐とは？

- 人が植栽した森林で、木の成長に伴って混みすぎた木を、抜き切りすることです。



間伐の模式図（林野庁HPより）



間伐のようす

間伐しないで放置された森林のようす

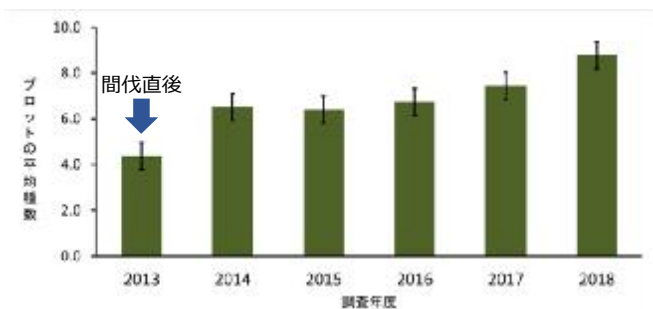


放置された森林のようす

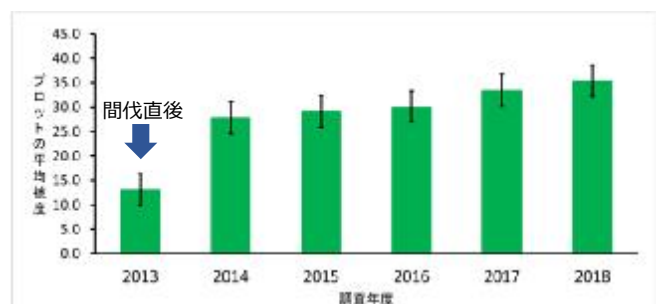
- 植栽された木は、幹が細長い【もやし状】となり、風や雪に弱くなります。
- 林内が暗く、下草（下層植生）が消失してしまいます。
- その結果、表土も流出してしまい、水を蓄える機能が弱まります。
- 多様な生物が生息するには不向きな環境となってしまいます。

間伐実施後の下層植生の変化

- 河内長野市内の森林で、2013年度に間伐を実施したスギ・ヒノキ林（林齢15～50年生）に30箇所の調査プロット（2m×2m）を設置し、毎年、下層植生の出現種数と被度（面積割合の被覆率）を調査しています。
- 間伐によって、下層植生の種数と被度がともに増加することが分かりました。
- 間伐を適切に実施することで、森林が有する防災や生物多様性保全などの多面的機能を持続的に発揮できるようにしていくことが重要です。



間伐後のプロット内の平均種数の推移



間伐後のプロット内の平均被度の推移